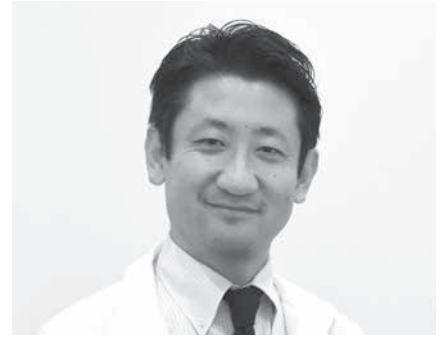


# 駅ホーム上にクリニックを開設 働く人々の医療アクセスを高める

医療法人社団創青会  
理事長 桑井太郎

働く人々がより利用しやすい場所にクリニックをつくり、医療へのアクセスを高めたい。その思いから、今年4月に日本初となる駅ホーム上のクリニックをJR西国分寺駅に開設した医療法人社団創青会。理事長の桑井太郎先生に、開設経緯や提供する医療サービス、そして今後の展望などをうかがった。



## ビジネスマンの医療アクセスの障壁を「駅ナカ」クリニックで解消

——まずは、貴法人の概要についてお聞かせください。

**桑井** 当法人では、「よく聞く、わかりやすく説明をする」を理念に掲げ、鉄道の駅ナカや駅ビルなど、3つのクリニックを展開しています。

もともとは2010年に小田急・東京メトロの「代々木上原駅」前で「あおい内科」を開院したのが始まりです。その後、2019年に同駅施設内に移転しました。2020年には東急大井町線「上野毛駅」の改札出口のすぐ横に「あおい皮膚科-駅ナカ上野毛-」をオープンしました。そして、2022年4月にJR中央線「西国分寺駅」で、日本初となる駅プラットフォーム上のクリニック「あおいクリニック-駅ホーム西国分寺-」を開業しました。

——駅ナカで複数拠点を展開していることが大きな特徴ですね。

**桑井** 当初からクリニック経営を

事業として捉え、複数拠点を展開することを視野に入れていました。そのために必要な条件が駅ナカということです。

患者さんがたくさん集まるクリニックというのは何がよいのでしょうか。いろいろなことが関係すると思いますが、その大きな要素は開業医自身の技術や診断能力、人柄なのです。患者さんは、その開業医に診てもらいたいからクリニックに行くのです。だから複数拠点を展開しようと考えても、そうした医師を集められなければ事業としてなかなか成り立たない。そもそも技術や人気がある医師というのは自分で開業してしまいます。

そのなかで複数拠点を成功させるためには、「ヒト」以外の優位性を担保する必要があります。そこで考えたのが圧倒的な「場所」の優位性を確立することでした。それが駅ナカという発想です。

私は複数の企業の産業医も務めているのですが、そこでビジネスマンから話を聞くと「健康問題が

あったとしても忙しくてそう簡単には医者にかかれない」という声が多いためです。確かに、一般的な医療機関に目を移すと、ビジネスマンの生活パターンと診療体制はマッチしていないのがほとんどです。

ビジネスマンの医療アクセスの最大の障壁は時間と場所です。だったら当法人がその障壁を解消する。駅ナカであればすぐに立ち寄ることができますし、時間に関しても、たとえば「駅ホーム西国分寺」では365日8時から21時まで診療する体制を取っています。ビジネスマンにとって最も利便性が高く、訴求力がある、この間口の広さは駅ナカでしか実現できないことだと考えています。

——一般的な街中での開業と比べ、駅ナカや駅ホームでの開業というのは、鉄道会社との折衝などもあり簡単に進まない印象を受けますが。

**桑井** 実は、各鉄道会社へのアプローチは開業時から行ってきました。もちろん最初はまったく相手

## 医療法人社団創青会

〒151-0066 東京都渋谷区西原3-8-5アコルデ代々木上原

TEL: 03-5738-2380

ホームページ: <https://www.aoi-naika.jp/>

理事長: 桑井太郎 (くわい・たろう)

日本内科学会認定内科医 / 日本医師会認定産業医 / 労働衛生コンサルタント

1972年生まれ。杏林大学医学部卒業後、杏林大学医学部付属病院救命救急センター、形成外科勤務を経て、2010年に小田急・東京メトロの「代々木上原駅」前で「あおい内科」を開院。

にされませんでした。潮目が変わったのは2019年に「代々木上原駅」施設内へ移転したときかもしれません。1つの実績ができたことで、各鉄道会社も前向きに私の提案を受け入れていただけようになったという印象です。今回、「西国分寺駅」ホームに開設する際も、JR東日本からは「一緒に仕事をやっていきましょう」という声をいただいています。

—— 鉄道会社側としては、医療機関を受け入れることにどのような意義、メリットを感じているのでしょうか。

**桑井** 医療は交通と同様に重要な社会インフラであること。この部分はお互いに共感できた社会的役割です。その上で私は人が集まる場所には必ず医療が必要になることをお伝えしてきました。

たとえば、災害時は交通網が麻痺して人々は医療にアクセスでき

ない。しかし、駅ナカにクリニックがあれば医療を受けることができます。「首都直下型地震」などの緊急時には当法人の医療資源を開放することを想定しています。また、電車内で急患が出た際、一次医療としてすぐに医療が受けられれば救命率は格段に高まります。駅ナカに医療機能があるのは社会インフラを守る鉄道会社にとっても非常に意義があることだと考えています。

### 提供する医療を最小限に絞る マーケットの大きさが最大の利点

—— 日本初となる駅ホーム上のクリニック「駅ホーム西国分寺」を開設し約5か月が経過しましたが、現在の患者数などを教えてください。

**桑井** 事業計画では開業1年目の1日の平均患者数を約40人と設定

しましたが、開業5か月目で、1日平均20名程度となっています。患者層は20～50代のビジネスマンが全体の8割ほどで想定したとおりです。

—— 「駅ホーム西国分寺」のポイントとしては、どのようなことがあげられますか。

**桑井** これまでの駅ナカとも異なり駅ホーム上ということ以外として、最大のポイントといえるのは、クリニックを小さくしたことです。「駅ホーム西国分寺」はもともと売店だったところで広さは33㎡です。ホーム上は大きい場所を確保できないので、いかに小型化して必要な医療を提供していくかを考えました。

これまで鉄道会社には医療機関から「拠点を出させてほしい」という話がたくさんあったそうですが結局、どこも入れなかった。その理由の1つとして医療機関側が必要な医療を提供するために一定の広さを要望するからです。私は鉄道会社が提供できる場所の広さに合わせて、提供する医療サービスを最小限に絞ったのです。それが可能であることは東急大井町線の「駅ナカ上野毛」ですでに実証済みでした。

もう1つのポイントとして、マーケットの大きさです。一般の開業医の場合、クリニックから概ね半径2km圏内、広くても4kmぐらいが診療圏ですが、当院は非常に広域で、東京から八王子の中央線



1日約30人の患者が来院。PCR検査にも対応する「駅ホーム西国分寺」(写真提供・医療法人社団創青会)

沿線、さらにはその先、埼玉、千葉、神奈川からも来られます。

駅で開業するという事は、電車を使って移動している方たちすべてが患者さんになるポテンシャルを持っています。

ちなみに、中央線は1週間で3,000万人が利用します。もちろん、この数字は途中下車の人もカウントされているので必ずしも「西国分寺駅」を利用・通過している人ばかりではありませんが、その10%でも300万人、1%でも30万人です。この人数が患者さんになり得るといえることです。

### 駅ホーム上でオンラインと対面のハイブリッド診療を提供

——提供する医療サービスを最小限に絞ったということですが、「駅ホーム西国分寺」では対面診療以外にオンライン診療を提供しているとお聞きしています。

**桑井** 実際、対面診療用の診察室が2つあり、その隣に検査室、そしてオンライン診療専用ブースが設置されています。

検査室には、いくつかの医療機器として採血と採尿、超音波と心電図があります。

オンライン診療専用ブースは、テレワークのためのステーションブースを医療用に転換したものです。当院の対面診療は基本的に内科ですが、それ以外の皮膚科・耳鼻咽喉科・婦人科にかかる疾患の場合は、オンラインで専門医の診療を受けていただくこととなります。対面とオンラインのハイブリッド診療でかかりつけ医機能を担保しているということです。

オンライン診療を取り入れたことで、セミリタイアしている子育て中の女性医師は自宅から診ることができるので、人材活用という意味でも有効です。この9月からもそうした女性医師に参画いただく予定になっています。

——実際の診療の流れはどのようになっていますか。

**桑井** オンライン診療は完全予約制です。予約日時に来ていただき画面上で診療を行います。対面診療は予約でも、飛び込みの診療も対応しています。

——患者層はビジネスマンが中心とのことですが、その特徴はどのようなところにありますか。

**桑井** やはり早く診療を受け、処方箋をもらい帰りたいというニーズが大きいです。ビジネスマンは時間をコストとして考えているので、適切で迅速な診断が求められます。もちろん、内科というのは守備範囲が広いので、病気によって診断にかかる時間は異なりますが、その患者さんの病気に合わせて、非常に効率的な形で回るようにしています。

受付も予約システムを利用しているため、問診票の記入時間も短縮でき、会計も自動精算機があるので、非常にスムーズです。患者さんが入ってから出ていくまで15分以内を目指しています。

——機能をコンパクトにしているからこそ病診連携、診診連携が非常に重要になりますね。

**桑井** 新宿のJR東京病院、杏林大学病院、立川の災害医療センターなどと密に連携を取り、自院で対応できないと診断した患者さんについては迅速に紹介します。

また、当院にはレントゲンがないので、必要な場合は対応できる地域のクリニックにお願いしています。

一般に地域の開業医同士は競合関係にありますが、駅の“内と外”ではマーケットが異なるため、当院とは競合しないのです。そういう意味でも地域のクリニックとの関係も非常に良好です。

——電車の音などが診療に影響することはないのでしょか。

**桑井** そうした課題は構造的に解消していますので、外音は完全に



「駅ホーム西国分寺」のクリニック内。一番奥がオンライン診療専用ブース(写真提供・医療法人社団創青会)



シャットアウトです。電車が通ったときに地面が多少揺れることはありますが、今のところ苦情はありません。また、診察室についても狭いなりに空間を大きくとるなど広がりがあるように見える仕掛けをしています。また、待合室に診療時の声が漏れ聞こえないように、人の声をかき消すサウンドマスクという音楽を流しています。

### PCR検査に対応したことで、少しずつ認知度が向上

—— 駅ホーム上で医療サービスを展開するからこその難しさはありますか。

**桑井** 通常の開業と比べ、保健所などと事前に丁寧な相談をしておくことが必要ですが、駅の“内”だからといって特別に難しかったわけはありません。

ただ、留意しなければならないと思ったのは、マーケットがこれまでと異なる点です。駅ホーム上にあるクリニックを患者さんの生活のなかでどう活用していただくか。日本初の試みということもあり、今はまだ患者さんもどういうクリニックなのか、どのように利用すればいいのかなど迷っておられるようです。きちんと診てもらえないのではないかといった不安もあるようです。

当院は一般にあるクリニックと何も変わらないこと、それでいて利便性が高いこと。そうしたことが浸透していくのに少し時間がかかるという印象です。

—— どれだけ人々の認知度を高められるかがカギですね。

**桑井** そうですね。もともと医療

という事業は認知してから医療機関に実際に受診するまでの行動に時間がかかります。たとえば、新しくできたケーキ屋さんであれば、「今日買ってみよう」となりますが、新しくできた医療機関は病気でなければ「今日行こう」とはなりません。

このコロナ禍で「駅ホーム西国分寺」では予約制でPCR検査を受け付けています。そのことが功を奏し、当院の認知度が上がり、現在は徐々に患者さんが増えてきているところです。

### 今後の展望は、多店舗展開で多くの人に医療提供を

—— 法人としては現在、3つのクリニックを運営し、さらに専門医によるオンライン診療にも対応しています。それには、人材確保が重要になりますが、この点についてはいかがでしょうか。

**桑井** そこはあまり苦勞していません。「駅ホーム西国分寺」については診療時間が長いこともあり、医師が28名でシフトを組んで分担しているわけですが、その枠はすぐに協力いただけました。

人材集めは「理念」をいかに伝えるかだと思っています。社会的に意味のある仕事には必ずニーズがあり、優秀な人材は、自分の能力を発揮できる場所を探しています。それを実現している、またしようとしている組織に対して人材は集まってくる。そして、集まった人材がまた新たな優秀な人材を連れてきてくれます。これは医師だけではなく。看護師、受付事務スタッフについても同様で

### 駅ホーム上クリニックの

### 3つの特徴

- ① 駅ホーム上に展開するために、クリニックをコンパクトに。
- ② 沿線に沿った広域なマーケットが展開。
- ③ ハイブリッド診療と迅速な診療で患者のニーズに対応。

す。そして、院長は集まった人材をとことん信頼して、相手を認めて口出ししない。それが自立した組織を生み出すと考えています。

—— 最後になりますが今後の展望などについてお聞かせください。

**桑井** 夢ではありますが、いずれ、最低でも50拠点まで拡大したいと考えています。

医療が鉄道の駅で展開されていくことで、これまで医療にアクセスできなかった人たちに貢献していきたい。それが健康寿命につながります。医療は社会資源で公共性の高いものです。お金を儲けるだけならこの事業をやるつもりはありません。社会的な意義があるから続けられています。今後、さらに同じ志を持つ医師たちと協力していくことで、この想いを実現していきたいと思っています。

この事業は、初めての事業で、どんな障害があるかわかりません。ただ、大変ではないものに大きな成果はないと思います。その代わりに、ある時期になったときに、誰もが見たことのない絶景が見えるはず。新しい医療の提供で人々を笑顔にする。その光景が見たいと思っています。(2022年8月24日/本誌編集部 伊藤之陽)